

# かかさんの乳

いで うみ 絵・宮沢 千賀



ギリシヤ人を母に、アイルランド人を父にもったハーン先生が日本にやって来たのは、江戸が東京になって二十年前くらいだった頃でした。男の人の頭のちよんまげは、ほとんどなくなっていました。まだ多くの人が着物を着て、草履をはいている時代でした。

その頃のたばこは、きせるという道具

具で吸われていることが多く、今のように紙で巻かれたたばこを吸う人は、ハイカラさんとよばれていました。きせるは、普通、三つの部品でできていました。たばこの葉を詰めて火をつけるところ、煙の通るところ、そして、煙を吸うところ。真ん中の煙の通るところを、羅宇といいました。羅宇の多くは、鉛筆ぐら

いの太さの竹の管でできていました。この管の内側に、たばこのやにがたまり、掃除しても、たばこの味に臭いかな匂いが残ってしまつようになる。新しい羅宇にすぐ替えたり、新しい羅宇に掃除したり、新しい羅宇にすぐ替えたりする職業がありました。羅宇屋といいました。

日本に来て何年かたつたある日、ハーン先生は、天秤棒をかついで家の前を通る羅宇屋の、つり下げた箱の中を見て、つい、ほほーと声を出しそうになりました。赤ん坊が入っていたのです。その日から先生は、この赤ん坊を連れた羅宇屋に会うのが、楽しみにになりました。赤ん坊は、布にくるまって寝ている時は、そこに優しい花の香が漂うようでした。起きている時はいつも、そこにだけぽっかり日があたっているようでした。通りがかるだけれど、その赤ん坊に声をかけずにはいられないほど、赤ん坊は、愛くるしい顔立ちと仕草をしていたのです。それにくらべ、くたびれた着物を尻はしよりにし

て、天秤棒をかつぐ羅宇屋の父親は、口元のしわすらやせて、年齢以上に歳をとって見えました。

箱の中の赤ん坊のまわりには、いくつかのおもちゃがありました。きつとだれかれとなく、かわいいこの子に与えたものでしょう。

そんな中に、いつも必ず、一枚の木の板に少し厚めの台木がついた、お位牌のようなものがありました。

半年ほどたつたころ、ハーン先生はこの羅宇屋がいつもの天秤ではなく、たぶん自分用にあつらえたと思われる、手押し車を押してくるのに会いました。

手押し車の上には木枠がとりつけられ、それは前後に区切られていて、前の枠には新しい羅宇や仕事の道具が、後ろの枠にはあの赤ん坊が、以前と同じように、布にくるまって入っていました。

子どもが大きくなったので、肩にかつぐには重くなつたんだな。先生は、ほほえましく思いました。

木枠には白い旗がかかげられ、そこには「きせる、らう替え」と大きな字で、その脇に小さな字で「お助けをねがいます」とありました。

そして、やはり子どもそばには、あのお位牌に似たおもちゃがありました。しかしそれは、子どもの後ろの、頭の上の小さな棚の上に、しっかりと立てられてありました。

ああ、やつぱりあれはお位牌なんだなと先生は思いました。

これは何か意味がありそうだと思つた先生は、家に帰ると、下働きをしてくれている万右衛門を呼びました。「あの羅宇屋を呼んできて、家のきせるの羅宇のすぐ替えをたのんでくれな

いかに。しばらくして、羅宇屋の手押し車が門の前に来ました。



あの赤ん坊は、外国人の先生の顔を見ても、あやしむでもなく、あどけない笑顔と、だれをも信頼するまっすぐな目で、先生を見つめました。

家から何本かのきせるが届くと、羅宇屋は「じゃ、仕事にかからせてもらいます」と言つて、車の前にまわり、黙々と作業の準備を始めました。先生は、しばらく赤ん坊の小さな手



をにぎったりしていました。ふと思いで、例の板に目をやりました。

それはやはりお位牌でした。

先生がじつとそれを見ていると、万右衛門が言いました。

「そのお位牌は、きつと、この子の母親のものです」

「うん、で、ここに書かれた漢字の意味は何だろう」

先生が聞くと、万右衛門は、お位牌に近づいて、その字を読み取って言いました。

「極楽へ行って、みんなに尊敬されるようになっている女の、人、というような意味です」

ハーン先生の家で働いているこの万右衛門という年寄り、だからにでも慕われていて、一度でも会えば、ずつと親しくしたいと思うようになり、ふしぎな老人でした。

それは、万右衛門が、人間を超えた大きな力を信じていること、自分のことはいつも二の次に考える生き方をしているからだろう。先生はこう思い、その生き方を尊いものだと思っていました。

その万右衛門が、一心に作業している羅宇屋に声をかけました。

「このお位牌は、おまえさんのお連れのものだろうね」

羅宇屋は手を止めて顔を上げ、ちよつと万右衛門を見てから、口元に懐かしさをふくませて答えました。

「ええ、かかのお位牌です」

「いつだね、おかみさんがなくなったのは」

「はあ、この子が生まれて、ちよつと二か月目でした」

「二か月、そりや、つらい思いをなさった」

「ええ」

「それから、ずつと、赤ん坊を連れて歩いていなさるかね」

「いや、死なれて半月ほどは、家でわしが見ていたんですが、いつまでも子守をしていることもできず」

「うん」

「かといつて、赤ん坊を世話してくれる乳母を雇う金も、ありません。それで、こうして子どもを連れて」

「そりや、たいへんだねえ。でも、どうしてお位牌もいっしょかね」

「実は、」

と言つて、羅宇屋は手に持った小刀を、作業していた台の上に置き、こんな話

先生が、目を丸くして言いました。

「そんな、羅宇屋さん、こんなに丈夫に、元気に、しっかり育っているじゃないか。重湯と水飴だけでこんなに育つんだから、これからも心配ない」

すると、万右衛門がお位牌をやさしく見つめながら言いました。

「いいや、それはちがいます。この子が立派に育っているのは、死んだこの子のかかさんが、乳を飲ませてくれたからです。この子はこれからも、乳が足りずに弱ることもありますまい」

そして、赤ん坊に向かって言いました。

「のう、坊、そうなのう」

木枠の中の赤ん坊が、笑いました。まるで、そこに、かかさんがいるかのように。



を始めました。

「実は、この子の母親が死ぬ時、こんな事を言つて死にました。あたしが死んだら、丸三年の間は、あたしはこの子のそばにいてやりたい。だから、あたしのお位牌を、いつもこの子のそばにおいておくんなさい。そうしたらあたしは、この子を守つてやれる。お乳だつて飲ませられる。だから、決して離さないで。生まれた赤ん坊が三つになるまでは、お乳の味が必要だつて言うでしょう。だから、三年の間は、

あたしはいつもこの子のそばにいて、この子を育てていてやりたい。お乳をあげたい。ね、忘れないで、きつとそうしておくんなさい」

羅宇屋は話を止めて、楽しみに小さな手を振っているわが子を見つめました。

「それで、こうして……」

万右衛門が、大きくうなずきました。「ええ、でも、ほんとうは、牛の乳でも飲ませられればいいんですが、重湯と水飴しか飲ませてやれなくて」

その時、それを聞いて驚いたハーン

「所出原作」

ラフカディオ・ハーン「コレラ流行期に」  
(平井呈一訳、心岩波文庫所収)